

『大日本古文書—正倉院編年文書』にみられる 新羅仏教の二・三の問題

福 士 慈 稔

一、始めに

『大日本古文書—正倉院編年文書』(以下『古文書』¹)を用いた仏教関係の研究は、一九三〇年に石田茂作氏が『古文書』の写経関係の記録を纏めて発表された『寫経より見たる奈良朝佛教の研究』²を嚆矢とする。その後、石田氏の研究、特に末尾に附された「奈良朝現在一切経疏目錄」(以下「奈良録」)を依拠とする研究が多くみられる。日本では『仏書解説大辞典』³、韓国では東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』⁴が代表的なものである。しかし、「奈良録」は奈良時代に伝来されていた一切経疏の整理が目的であるため、異名同書と考えられる場合も全て収録し、また『古文書』の掲載巻頁を一例しか載せていない。「奈良録」しか用いない場合、誤記か異名同書か、または同名異書か錯綜してしまうのである。

更に『古文書』を用いた研究で参照されるのが、『古文書』にみられる審詳所持本を整理した堀池春峰氏⁵と平岡定海氏⁶の研究である。しかし、この両氏の研究も、研究対象とした『古文書』の当該部分の相違から、審詳所持本推定

『大日本古文書—正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題(福士)

『大日本古文書—正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福士）

数に相違がみられている。

また『古文書』中の書名と人名を整理した労作として木本好信氏の『奈良朝典籍所載仏書解説索引』⁷がある。頗る有益ではあるが、研究を志すものとしては他の研究を典拠とすることは許されるものではない。氏の研究を手掛かりとするとしても、『古文書』に立ち返ることは必須である。

よって本稿は、筆者の少しばかりの『古文書』研究を〈奈良録・古文書・審詳請来経録比較表〉として末尾に附し、『古文書』を用いた新羅仏教に関する研究の紹介と、それに関する筆者の見解、そして『古文書』を用いる新羅仏教研究の問題点に関して私見を述べようとするものである。

二、金天鶴氏『華嚴経文義要決問答』の基礎的研究

金天鶴氏の論稿は、表員の現存の写本から引用文献の検討と教判の問題点、及び表員の華嚴経観を論じたものである。冒頭で日本の目録類から『華嚴経文義要決問答』（以下『要決問答』）の記載を整理し、「奈良録」の記載から実際に『古文書』の該当箇所（一一五六七）の天平勝寶三年条（七五一年）に『要決問答』に関する記録があることを確認する。そして、今まで表員の生没年に関しては現存資料に記すところがなく、唯一現存する著述の冒頭に「皇龍寺釈表員集」とあることから新羅皇龍寺の僧であったとしか分からず、現存書『要決問答』が慧苑の『統華嚴経略疏判定記』を引いていることと、寿靈の『五教章指事記』が『要決問答』を引いていること等から表員の活動を八世紀の中頃から後半としていたのを、金天鶴氏は表員の活動年代はもっと早かったのではなかったかとするのである。

金天鶴氏の論稿を補足する意味で堀池春峰氏の論稿を紹介すると、勝寶三年条の『要決問答』の記事の背景は、東

大寺大仏開眼供養を眼前にむかえた勝寶三年に東大寺で華嚴宗を加えた六宗が成立するに至り、後日大仏殿内に六宗繪厨子が設置され、六宗必要の經論疏集伝などが納められたらしいとされ、同年五月頃に華嚴宗厨子に納置するものか、或いは華嚴宗所専用の藏書の書写を開始されたことを契機とし、その書写事業の一環として「華嚴文義要決一卷表員師集」という記述が出ていとされる。ともかくも現存史料上では初出であるが、同書がどのような經由で日本に伝わったのか分からず、審詳請來經錄にも表員の『要決問答』はみられない。

さて表員の『要決問答』の成立年代と深く拘わっているのが慧苑の『続華嚴經略疏刊定記』（以下『刊定記』）の成立年代であるとは先学の指摘するところであるが、『古文書』にみられる慧苑の記録は

天平十一年（七三九） 新譯花嚴音義二卷（七卷—八五頁）

天平二十年（七四八） 續花嚴略疏刊定記卷第十二（二〇—四四九）

天平二十年（七四八） 續花嚴略疏刊定記卷第七（二〇—四四九）

勝寶元年（七四九） 花嚴經慧蘭疏一部（第一卷—十六卷）（二—一九二—九三）

勝寶二年（七五〇） 花嚴經慧蘭師疏疏生等布施錢事 合寫疏一部廿四卷（三一—四一九）

寶字七年（七六三） 花嚴經疏一部廿四卷（一六—三七四）

以上である。慧苑の著述では『新譯花嚴音義』が最も早く七三九年に見られるが、『刊定記』の初出は七四八年十月十七日で「續花嚴略疏刊定記」としてみられる記事である。¹⁰堀池氏は、七四八年九月九日に東大寺花嚴供所が写一切経司に華嚴經疏を「早速令写」と依頼したという記事と、九月十四日からの書写開始の記事を、『刊定記』と関連させて『刊定記』将来による書写とする。¹³しかし、九月九日の記録には「花嚴疏」、九月十四日には「寺花嚴疏充

『大日本古文書—正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福土）

本帳 廿年九月十四日始 新疏廿四卷 用紙一千一百冊帳」とあり、「花嚴疏」及び「新疏廿四卷」が慧苑の『刊定記』を指すのか断定できないものがある。何故ならば、十二月十七日の記事ですら慧苑の名はなく、

大友廣國 寫花嚴疏事

續花嚴疏第三用紙五十二張 續花嚴刊定記卷第六用紙四十七張

續花嚴疏刊定記卷第十二用紙廿九張 續花嚴略疏刊定記卷第十二用紙廿六張

續花嚴略疏刊定記卷第七用紙六十二張 第八上用冊枚

合二百十五張^{五十六} 「錢一貫五百五文」^{七百九十二文}

天平廿年十二月一七日

右のように、「續花嚴疏」、「續花嚴刊定記」、「續花嚴略疏刊定記」、「續花嚴疏刊定記」と並べられ、「續花嚴疏刊定記」と「續花嚴略疏刊定記」の十二巻の用紙が異なっているため、両本が別本のような記事となっていること、また「新疏廿四卷」に関しても七四七年十二月十九日の「華嚴疏廿四卷十二^三弓遠法師撰七^十弓元曉師□法藏一卷^{十四}」という例もあり、新疏が一部でない可能性も考えられるからである。ともあれ「續花嚴略疏刊定記」としての『刊定記』の確実な初出は七四八年十二月となる。この『刊定記』も表員の『要決問答』と同様に審詳請来経録にはみられず、伝来の経由と年次が不明なものの一つである。

以上のように日本の史料では表員の『要決問答』の初出は七五一年五月であり、表員が引用している慧苑の『刊定記』の初出は七四八年十二月であることから、請来にかかる渡航期間を考慮に入れて若干の月数を差し引くとしても『要決問答』は七五一年の初め頃までには完成していたとしか言い得るものではなく、活動年代に関して七五一年

以前に活動していたということに関しては稽首できるが、それ以降生存していなかったとは断定できるものではない。しかしながら金天鶴氏のように『古文書』の整理による考察は、今後の指針となるものと考えられる。

三、尹善泰氏の「新羅村落文書」の作成年代と用途

尹善泰氏の論稿は、正倉院に保管されていた経帙の中の「華嚴経論第七帙」と墨書された帙芯から発見された「新羅村落文書」の制作年代を、『古文書』の記録を中心としてその制作年代を推定したものである。「華嚴経論第七帙」とは審詳が新羅から将来した『華嚴経論』六五巻を入れていた七帙の中の第七の帙である可能性が高く、よって「新羅村落文書」の制作年代とされる乙未年とは審詳の没年（七五一年）以前の六九五年とすることができるとはならないか、とするものである。

尹善泰氏の論稿からは『古文書』全巻を精読した上での確信に近いものが感じられ、村落文書の現物を見ていない筆者とすれば最初の、第一節「文書の状態と判読」、及び第二節「文書の作成年代」の第一項「文書に記録される年」と「壹月」、第二項「華嚴経論」経帙の正倉院入庫過程」の内容に関しては何も言うべきところがない。第三項「華嚴経論」の日本流入と流通状況」に関しても尹善泰氏の緻密な史料整理と堅実な手法に感心するだけである。ただここで『華嚴経論』日本伝来に関して若干の私見を述べてみたい。

先ず『華嚴経論』（以下「華嚴論」）が靈辨のものであることに關しては、「奈良録」では天平十二年七月八日の「寫經所啓」で「花嚴論冊九卷 取因論一卷 花嚴經修慈分一卷 以上審詳師本」（七一四八九）とある『華嚴論』を李通玄のものではないかとしているが、李通玄の『新華嚴経論』は『古文書』には見られない。天平勝寶五年五月七

『大日本古文書—正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福士）

日類収の「未寫經律論集目錄」に「華嚴論六百卷劉譚之造華嚴論一百卷後魏釋靈辨造」（二二—五五三）とあり、更に天平勝寶五年九月四日「經疏出納帳」に「謹啓 奉請書事世親菩薩造十地論一部並後疏一部 又花嚴傳一部五卷又靈辨師造花嚴論初帙十卷」として返還依頼の善珠（良弁）の書簡（三一六三〇）、天平勝寶三年五月二十五日の藏經に「華嚴經論一部五十卷且來者 靈辨師述用紙一千二百七十五張 施九十貫」（二一—五六六）等とあることから、天平十二年から登場する『華嚴論』四八・四九・五〇巻及び六五巻を靈辨の一〇〇巻中のものとする尹善泰氏の見解は正しい。問題はその『華嚴論』の巻数と所有者の問題である。尚、「華嚴論」、「花嚴論」、「華嚴經論」、「花嚴經論」等の表記の不統一に関しては、『古文書』によく見られる傾向であることから問題とすべきものではないと考える。

（一）『華嚴論』五〇巻の問題

『古文書』での『華嚴論』の初出は前述のように天平十二年七月八日（七四〇年）の「寫經所啓」で

花嚴論冊九卷 取因論一卷 花嚴經修慈分一卷 以上審詳師本（七—四八九）

とある記録である。『華嚴論』四九巻を審詳が所持していたことを知ることが出来る。ただ『華嚴論』を審詳だけが所持していたわけではないことが、「律論疏集傳等本收納并返送帳」の天平十六年二月二十六日に

納花嚴論冊七卷第一帙欠第一 第二帙 第三帙 第四帙 第五帙

右慈訓師所 受人成 以十九年二月十一日返送慈訓師所（八一—一八九）

と慈訓から『華嚴論』四七巻を借りたことが知られ、更に「律論疏集傳等本收納并返送帳」の天平十六年九月九日に

納花嚴論第一卷

右慈訓師所書也（八一—九二）

とあり、第一帙の欠巻第一巻を慈訓から借り入れたことが知られる。ここで慈訓所持の『華嚴論』が、天平十六年二月二十六日の段階で欠となっていた第一が補完されたことで、第二巻と第二九巻を欠いた五〇巻中の四八巻であったことが窺われる。それが第一帙から第五帙までに納められていたことは「常疏充装矛等帳」天平十六年四月からの記録（八一—三四一—三四八）、及び「寫疏論集常校帳」（八一—三七八—三八九）をみれば確認することが出来る。そして天平十六年十二月二十四日の「寫疏所解」の

a—花嚴論一部五十巻且寫冊八卷欠第廿一卷廿九卷用紙一千二百六十八枚（八一—五二五）

年月を欠いた断簡であるが、上と同内容の裏書きで「八十六部 五百五十四巻」とされるものに

b—花嚴論五十巻 一千二百七十五紙（八一—五二八）

とあり、aとbの二つの『華嚴論』の用紙の枚数の相違からも『華嚴論』五〇巻本が慈訓所持本と審詳所持本の二本あったことが窺われるのである。しかし、以後の記録（九—三八二・三八五、一一—五六二・五六四・五六六、一二—一七四・一七六・二六二・五一九・五二八・七五九等々）では両書が混同されて記録されているようである。

（二）『華嚴論』六五巻の問題

次に『華嚴論』六五巻の問題である。先述の平岡氏は「経録」の九〇番に、堀池氏は「経録」の二番に挙げていて、『華嚴論』六五巻が審詳将来のものと考えているようである。¹⁶『古文書』における『華嚴論』六五巻の初出は、前述の天平十九年十二月十九日（七四七年）の「自内裏奉請疏本」（一〇—一七八）にみられるものである。

『大日本古文書—正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福士）

『大日本古文書—正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福士）

華嚴論七帙六十五卷 華嚴疏廿四卷^{十三} 引遠法師撰七^十元曉師□法藏師一卷

孔目六卷 方軌四卷

旨歸一卷 五教一卷

傳二卷花嚴經者 傳之記一卷

料簡一卷花嚴經者 一乘法界圖一卷

入法界品抄一卷 親譯起信論記一卷

脩慈分二卷一卷内裏納了

とあり、続いて依頼の章疏の中での平攝の所持本の内訳と借り主の名と、そして返還の月日が記されている。華嚴論・孔目・旨歸・方軌・五教に関しては平攝の所持本の中にも、借り手の借本の中にもその書名を捜すことはできない。恐らくは内裏納入もされていない、平攝の所持本にもないもので、書名だけが先行したものであったのではないかと考えられる。それは「脩慈分二卷」に続く「一卷内裏納了」とある一文と、その後『華嚴論』六五巻が『古文書』に現れるのは十九年後の七六六年であるという時間的な空白期間があるからである。ともかくも初出から十九年後の天平神護二年十月三日（七六六年）の「僧寶行借書目錄」に他の章疏と共に

華嚴論六十五卷（一七—二〇）

として七六六年に實業が（恐らくは審詳没後と考えられるため東大寺写経所から）借りたことが記される。

さて、平岡・堀池両氏が『華嚴論』六五巻を審詳所持本とみた根拠は文書の題目が無くなっている景雲二年十二月

四日（七六八年）の経藏に

華嚴經論一部六十五卷穀皮帙六枚^七（一七一—一二九）

とあり、また景雲二年十二月二日の「奉寫一切經司牒 造東大寺」に他の章疏と共に

華嚴經論一部六十五卷（一七一—一二九）

とあるのを以て審詳所持本（審詳師經内）としているようである。確かに前後に景雲二年二月三日の八一巻の審詳所持本の記録（一七一—一〇七—一〇九）、景雲二年十一月二十五日の「造東大寺司牒 奉寫一切經所」として審詳所持本の一部（一七一—一三五—一三七）、景雲二年十一月十日の「奉寫一切經所牒 造東大寺司及三綱所」として審詳所持本の二百十四巻の記録（一七一—一三九—一四一）がみられる。ただし景雲二年十二月四日（七六八年）の經藏に關しては、異筆で「並審詳師之」（一七一—一二九）とあるために「華嚴經論一部六十五卷穀皮帙六枚^七」を審詳所持本としたものであろうが、ここで注意をしなければならないのは、「並審詳師之」が異筆であることと、「右」または「以上」〇〇卷審詳師經内文という一文がなく、更に書末に追筆で「雜集論疏十卷^{審詳師}」とあることである。

また景雲二年十二月二日の「奉寫一切經司牒 造東大寺」では審詳所持本の列記の後に

右五十部「二百五十」卷「審詳師」（一七一—一三四）

とある二つの「」内の文字が追筆であることも若干気にかかるところである。

（三）審詳将来の『華嚴論』

以上、気になったところを述べてみたが、大きな問題としてはやはり、天平十二年七月八日（七四〇年）の「寫經所啓」で登場する審詳所持本の『華嚴論』四九巻が、どうして景雲二年十二月（七六八年）という二十八年後に六五

『大日本古文書—正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福士）

『大日本古文書——正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福士）

巻に替わったのかという問題である。天平十六年の『華嚴論』の筆写の記録の多さはそのまま『華嚴論』に対する関心を意味するものである。もし当時、審詳が六五巻を有していたならば第六帙及び第七帙の筆写と結びつくものと思われる。また『華嚴論』六五巻の初出である天平十九年十二月十九日（七四七年）の際も、『華嚴論』六五巻の確固たる存在を確認できず、その後、十九年後の七六六年に恐らくは東大寺所蔵として登場し、景雲二年十二月四日（七六八年）からは東大寺所蔵の審詳経内として登場するのである。筆者とすれば、天平十九年に『華嚴論』六五巻の存在を知ったが平攝も審詳も所持していなかったため、天平神護二年（七六六年）までに不足分を補充する意味で五一巻から六五巻が新羅より新たにたらされ、七六八年頃に審詳経内の『華嚴論』四九巻に編入された可能性を思うものである。そのように考えると、新羅村落文書の成立を六九五年とせず、日本の依頼によって新たに新羅で筆写されたものとすれば、日本の史料に再登場する七六六年を再考し乙未年を七五五年とすることも可能と思われるが、これはただの推論にすぎない。ともかくも、その後、寶龜二年からも筆写され、またそれが校正された記録が『古文書』にみられるが（一九一四・五二・五八・六二・六五・七三・七四・七五・三七五）、第六帙及び第七帙の記録を捜すことは困難である。以後の記録としては寶龜四年七月十七日（七七三年）の「僧奉正請経論啓」に

花嚴論一部六十五卷

として『華嚴論』六五巻の借り出しを請う書簡が見られるだけである。

四、結語にかえて、『古文書』を用いる新羅仏教研究の問題点

以上、先行の『古文書』を用いた研究の紹介と若干の問題点を挙げてみた。ただ問題点を挙げるに止まり、その解

答を提示することはできなかった。これは『古文書』自体が持つ問題、つまり『古文書』が奈良時代に計画的に編集されたものではないこと、記事が断片的なものが多く、中には文案やメモのようなものもあること、附設〈奈良録・古文書・審詳請来経録比較表〉では義寂の著述として便宜上「法花經論述記一卷」として挙げたが、『古文書』には「法花經論述記一卷」(一七—九八)と「法華經論述記一卷」(一七—一〇一)というように「花」と「華」の混同が頻繁にみられ、また誤記・脱字等がみられること、よって異名同本・同本異名か判断が困難であること等々の問題のためである。

附設〈奈良録・古文書・審詳請来経録比較表〉で「奈良録」、「古文書」、「古文書」にみられる「審詳請来経録」から新羅諸師の著述を抜き出し、「奈良録」から抜き出した著述にはその番号、『古文書』から抜き出した著述には作者名がみられる巻頁で早期のもの一例のみを付した。『古文書』及び「審詳請来経録」の段で()の中に入れた著述は、『古文書』及び審詳請来本の中に書名はみられるが著者名がみられないものである。よって円光の『大方等如来藏經私記』、神昉『十輪經抄』、義湘『一乘法界図』、行達『俱舍料簡』、明皐『海印三昧論』等々は、後代の目録によって作者と著述が一致するものである。他の諸師の著述も後代の目録によって一致するものが多い。また巻数の不同も多く、同書で一〇巻・一六巻・二〇巻と異なる記録がある場合は円測「成唯識論疏一〇(一六・二〇)巻」というように()の中に入れた。このように『古文書』自体が多くの問題を含んでいるため、『古文書』研究はそれだけで完了するものではなく、後代の目録、後代諸師の章疏などを用いた総合的研究が必要なのである。

とはいえ、『古文書』には審詳は問題があるとしても、新羅僧と考えられる二十二名の著述が記録されており、それによって八世紀中頃までに日本に伝わっていた新羅諸師の著述と、筆写の記録によってその重用度が確認できるの

『大日本古文書—正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福士）

である。『古文書』にみられる新羅諸師とその著述と「五宗録」等後代の目録との対照表は『身延論叢』及び『身延山大学仏教学部紀要』で発表する予定である。

尚、本附設表は平成十八・十九年度科学研究費補助金基盤研究(C)「十二世紀末までの日本各宗にみられる新羅・高麗仏教に対する認識に関する研究」(課題番号一八五二〇〇四五)による研究成果の一部である。

注

- * 1 東京大学史料編纂所編『大日本古文書正倉院編年文書』(東京大学出版会、一九〇一年—一九四〇年)、尚、近年、宮内庁正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成』もみられるが、本稿では翻刻された東京大学資料編纂所編本を用いることとする。
- * 2 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』(東洋文庫、一九三〇年)
- * 3 『仏書解説大辞典』(大東出版社)
- * 4 東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』(国書刊行会、一九八二年)
- * 5 堀池春峰『華嚴経講説よりみたる良弁と審詳』(『南都仏教』三二、一九七三年)
- * 6 平岡定海『新羅の審詳の教学について』(『印度学仏教学研究』二二—二、一九七二年) 及び『日本寺院史の研究(古代編)』(吉川弘文館、一九八一年)
- * 7 本本好信『奈良朝典籍所載仏書解説索引』(国書刊行会、一九八九年)。尚、元曉の著述に限定したものであるが、本本氏の研究と照らし合わせたものが拙論『「古文書」にみられる元曉著述の問題点』(『新羅元曉研究』大東出版社、二〇〇四年、一三八—一四七頁)である。参照されたい。
- * 8 金天鶴氏『華嚴経文義要決問答』の基礎的研究』(『朝鮮半島に流入した諸文化要素の研究(二)』学習院大学東洋文化研究所調査研究報告四四、一九九九年)
- * 9 堀池氏前掲論稿
- * 10 『古文書』一〇巻四四九頁

- * 11 『古文書』一〇卷八二―八三頁
- * 12 『古文書』一〇卷八九頁
- * 13 堀池氏前掲論稿
- * 14 『古文書』一〇卷二七八頁
- * 15 尹善泰「〈新羅村落文書〉の作成年代と用途」(二〇〇〇年度ソウル大学博士學位請求論文『新羅統一期の村落支配―新羅古文書と木簡の分析を中心として』)
- * 16 平岡氏・堀池氏前掲論稿

『大日本古文書―正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題(福士)

『大日本古文書―正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福士）

附設〈奈良録・古文書・審詳請来経録比較表〉

僧名	奈良録	古文書	審詳請來經録
一（円光）	如来蔵經私記三卷	（大方等如来蔵經私記三卷）	（大方等如来蔵經私記三卷）
二 円測	解深密經疏一〇卷 仁王經疏三卷 心經疏二卷 多心經疏一卷 般若心經疏一卷 摩訶般若波羅蜜心經疏一卷 無量義經疏三卷 唯識論疏二〇卷 成唯識論疏一〇卷 廿唯識論疏二卷 因明論疏二卷 理門論疏二卷 因明正理門論疏二卷 百法論疏一卷 觀所縁縁論疏二卷 六十一見章一卷	二〇一六・二〇一七 （大方等如来蔵經私記三卷） 因明疏二卷 因明論疏二卷 大因明論疏二卷 因明正理門論疏二卷 因明正理門論疏二卷 觀所縁々論疏一（二）卷 解深密經疏一〇卷 心經疏一卷 多心經疏一卷 般若心經疏一卷 摩訶般若經疏一卷 摩訶般若波羅蜜多心經疏一卷 仁王經疏三（五）卷 百法記一卷 百法論疏一卷 無量義經疏三卷	一七卷一三六・一三九頁 一一一四五二 七一四八九 二四一四〇二 一七一〇六 八一五三三 一一一五五・三八二 二一五一〇 七一四九一 九一三八四 一六一四〇一 八一五三四 一一一五八 一一一〇 一六一三三二 九一三九三 一一一五五 四一九四

四 元曉	華嚴經疏八卷	一八二八	二十唯識疏二卷	二一五五	華嚴經疏一〇卷
	兩卷無量壽經宗旨一卷	一八八八	円測師唯識疏	一〇一五八	起信論疏二卷
三 (神昉)	兩卷無量壽經宗旨一卷	一八八九	唯識疏一〇卷	七二二七	起信論別記一卷
	兩卷無量壽經宗要一卷	一八九〇	唯識測法師一〇卷	九一五二	勝鬘經疏二卷
三 (神昉)	勝鬘經疏二卷	一九〇八	唯識論疏一(二〇・一五)卷	七四八九	楞伽經疏七卷
			唯識論円測師疏六卷	九三八二・五九九	
三 (神昉)	十輪經抄二卷	一九二四	唯識論測法師疏二〇卷	一一三三一	
			成唯識論疏一〇(二六・二〇)卷	三一九九	
三 (神昉)			成唯識論疏一〇(二六・二〇)卷	九一三八九・六二四	
			成唯識論測法師疏	一〇一四四二	
三 (神昉)			(六十一見章一卷)	三一三三	
			(六十二見章一卷)	一一三〇九	
三 (神昉)			(十輪經抄二卷)	二一三六一	
				一七一九	
三 (神昉)				二一七二九	
				二七一四三	
三 (神昉)				八一六九	
				八一三三九	
三 (神昉)				二一三六七	
				二一三八〇	
三 (神昉)				二一九・三八〇	

『大日本古文書—正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題(富士)

註勝覺經疏四卷	一九〇九	般舟三昧經略記一卷	二四一五	中辺分別論疏四卷
般舟三昧經略記一卷	一九二五	般舟三昧經略疏一卷	二一三八一	大乘觀行門二卷
般舟三昧經略議一卷	一九二六	入楞伽經疏七（八・一三）卷	一三一二二	雜集論疏五卷
般舟三昧經略疏一卷	一九二七	入楞伽經疏八卷	一一五六四	梁撰論疏抄四卷
楞伽宗要論一卷	一九四〇	楞伽經疏七（八・一三）卷	二一〇・一四	世親撰論疏四卷
楞伽經宗要一卷	一九四一	維摩經疏三卷	二二一四	三論玄義一卷
入楞伽經疏八卷	一九四二	解深密經疏三卷	二一三八〇	廣百論撮要一卷
楞伽經疏一三卷	一九四三	深密經疏	一七一三六	法花略述一卷
維摩宗要一卷	一九六八	金光明經疏八卷	三一六四二	（金剛三昧論疏三卷）
維摩經疏三卷	一九六八	最勝王經疏八卷	二二一五三	（起信論私記一卷）
深密經疏三卷	一九六九	金鼓經疏八（一五）卷	二二一〇	（一・道義一卷）
八卷金光明經疏八卷	一九八二	不增不減經疏一卷	八一三七一	（二・障章一卷）
最勝王經疏八卷	一九八七	金剛般若經疏三卷	一〇一三三〇	（宝性論料簡二卷）
金鼓經疏八卷	一九八八	法花要略一卷	二一三八〇	（十門和諍論二卷）
不增不減經疏一卷	一九八九	法花略述一卷	一七一三三	（楞伽經宗要一卷）
不增不減經疏一卷	二〇一八	法花疏五卷	一一五六五	（本業環珞經疏二卷）
大惠度經宗要一卷	二〇一九	金剛三昧（經）論三卷	二一五三八	（般舟三昧經略記一卷）
般若宗要一卷	二〇二三	金剛三昧經論疏三卷	二一五四一	（不增不減經疏一卷）
大惠度經樞要一卷	二〇二四	涅槃經宗要一卷	二一三八七	（涅槃經宗要一卷）
金剛般若經疏三卷	二〇二五	涅槃經宗要一卷	二一三	（法花經要略一卷）
法華要略一卷	二〇五四	涅槃經宗要一卷	二一三	（兩卷無量壽經宗旨一卷）
	二二二五・			
	二二二六		一六四〇三	

法花略述一卷	二二二七・	涅槃經疏五卷	二一三七九	(大惠度經宗要一卷)
法華宗要一卷	二二二八	梵網經疏二卷	二二一五	(菩薩本持犯要一卷)
金剛三昧經論中下	二二二九	梵網經私記一卷	二二一九	(金鼓經疏八卷)
金剛三昧論三卷	二二五二	梵網經菩薩戒本私記一卷	一八四六二	(判比量論一卷)
金剛三昧經論疏三卷	二二五三	梵網經上卷疏一卷	一六四〇三	(六現觀義發菩提義一卷)
金剛三昧經論記三卷	二二五四	菩薩本持犯要記一卷	一六四〇三	(初章觀文一卷)
涅槃經宗要一卷	二二五五	菩薩戒本持犯要記一卷	二一三八二	
涅槃經疏五卷	二二六五	瑜伽抄五卷	一六四〇三	
梵網經疏二卷	二二六六	瑜伽論抄五卷	二二一九	
梵網經私記一卷	二二二八	雜集論疏五卷	二二一六	
梵網經菩薩戒本私記上	二二三九	雜集論料簡一卷	一七一〇七	
梵網經菩薩戒文義私記序上	二二三〇	弁中辺論疏四卷	一八四六一	
梵網經上卷疏一卷	二二三一	中辺分別論疏四(三)卷	二一三八一	
菩薩本持犯要記一卷	二二三二・		三一六五三	
菩薩戒本持犯要記一卷	二二四三・	撰大乘論抄四卷	二二一九	
瓔珞經疏二卷	二二四五	世親撰論疏四卷	二一三八一	
瑜伽抄五卷	二二四六	梁撰論疏抄四卷	三一六五四	
雜集論疏五卷	二二九三	起信論疏二卷	三一六一八	
中辺論疏四卷	二二三五	元曉師起信論疏二卷	二一三五五	
中辺分別論疏四卷	二二三三	起信論別記一卷	八一三三九	
	二二三四	元曉師起信論別記一卷	八一六九	
	二二三四	起信論記一卷	八四二七	

(大惠度經宗要一卷)
(菩薩本持犯要一卷)
(金鼓經疏八卷)
(判比量論一卷)
(六現觀義發菩提義一卷)
(初章觀文一卷)

弁中辺論疏四卷	二三四五	一道章一卷	一六―四〇五
撰大乘論抄四卷	二三四七	一道義章一卷	一一―五六六
撰大乘論抄記四卷	二三四八	二障義章一卷	一一―五六七
世親撰論疏四卷	二三四九	二郭章一卷	一一―五六七
梁撰論疏抄四卷	二三五〇	大乘二障義一卷	一二―三八一
起信論別記一卷	二四三八	広百論撮要一卷	一六―四〇七
起信論記一卷	二四三九	三論玄義	一二―三八三
起信論一道章一卷	二四四〇	宝性論宗要三卷	一七―一〇八
一道義一卷	二四四一	掌珍論料簡一卷	一一―五六六
一道章一卷	二四四二	大乘觀行門三（一）卷	一二―三八二
起信論二彰章一卷	二四四五	十門和諍論二卷	一七―九〇
二障章一卷	二四四六	六現觀義発菩提心義浄義合一卷	一一―五六六
起信論二郭章	二四四七		
大乘二章義一卷	二四四八	因明疏一卷	一二―三八三
大乘二障義一卷	二四四九	（華嚴綱目一卷）	一二―三五五
二障義章一卷	二四五〇	（兩卷无量寿經宗要）	一一―四二八
起信論疏二卷	二四五一	（般舟三昧経略議一卷）	一二―三七九
広百論撮要一卷	二四七八・		一三―三五
	二四七九		一二―三六二
三論宗要一卷	二四八六		二五―一七六
三論宗要記一卷	二四八七		二〇―四一九
宝性論宗要一卷	二四九三		

宝性論料簡一卷	二四九四	(楞伽宗要論一卷)	八一五二三・五八六
宝性論料簡三卷	二四九五	(楞伽經宗要一(二)卷)	一一一四二八
竟一乘宝生論料簡一卷	二四九六		一七一・一三六
掌珍論料簡一卷	二五〇三・	(楞伽宗要)	一六・四〇二
	二五〇四		一七一・九四
大乘觀行門三卷	二六三八・	(維摩宗要一卷)	七・二三
	二六三九	(維摩經宗要一卷)	七・二二〇
判比量論一卷	二六五一	(不增不減經疏一卷)	三一八六
初章觀文二卷	二六九九	(大惠度經宗要一卷)	三一八六
十門和諍論二卷	二七〇〇		一七一・一三九
六現觀義發菩提心義淨義	二七六七・	(般若宗要一卷)	一一一七・一
含一卷	二七六八	(大般若宗要一卷)	一一一・一五六
		(般若心經疏一卷)	三一六五一
		(法花宗要一卷)	二一三五六
		(梵網經菩薩戒文義私記序上	八一四四〇
		卷)	二二一・八一
		(瓔珞經疏二卷)	三一八六
		(中辺論疏四卷)	一一一・三八一
		(起信論私記一卷)	三一五三〇
			一一一・一八六
			一一一・一六

七 憬興	无垢称經疏六卷	一九七〇	憬興師金光明經疏	九一四二六
六 法位	无量寿經義疏二卷	一八九四	无量寿經義疏二卷	一七一一九
五 (義湘)	華嚴一乘法界図一卷	一八二九・ 一八三〇	(一乘法界図一卷)	八一五三九 一七一四四
			(二諦章)	一六一四二八
			(三論宗要一卷)	一六一四〇六
			(三論宗要記一卷)	一七一七九
			(宝性論料簡一(三)卷)	一一三〇四
			(判比量論一卷)	二五一一七六
			(六現觀義發菩提心義淨義合一卷)	一二一五四一
			(初章觀文一卷)	一七一九九
			(阿弥陀經疏一卷)	一二一三八三・ 五四〇
				七一四八八
				一七一四〇
				三一八八
				三一八七
				一七一四〇
				一七一三八・ 一四一
			(一乘法界図一卷)	一七一四〇

深密經疏五卷	一七八三	懺興師最勝王經疏	九一四三一
最勝王經疏五卷	二〇〇〇	俱舍論抄四卷	一二一〇
金光明最勝王經略讀五卷	二〇〇一	解深密經疏五卷	一二一五三
金光明最勝王經疏五卷	二〇〇二	深密經疏五卷	一二一一〇
最勝王經疏一〇卷	二〇〇三	顯揚論懺興述贊	九一二三
法華經疏一〇卷	二一三二	顯揚論述記八卷	九一三九三
涅槃經述讀七卷	二一六七	顯揚論述贊一六卷	一六一四〇四
涅槃經述讀一四卷	二一六八	顯揚論疏一〇卷	三一六四六
涅槃經疏一四卷	二一六九	金光明經疏八卷	九一三九二
弥勒經疏三卷	二二一五	金光明最勝王經疏五卷	九一二六四
弥勒菩薩經述讀三卷	二二一七	金光明最勝王經略贊五卷	二四一三九八
大灌頂經疏二卷	二二二四	最勝王經懺興疏	九一三一
顯揚論疏四卷	二二二七	最勝王經疏五卷	八一五三四
顯揚論述讀一〇卷	二二二八	成唯識論疏	二四一五一三
顯揚論述讀四卷	二二二九	大灌頂經疏二卷	一七一二八
顯揚論述讀一六卷	二二三〇	大般涅槃經疏四卷	二四一五一五
成唯識貽量二〇卷	二三八一	涅槃經懺興師疏一二卷	一六一四八
俱舍抄四卷	二五七二	涅槃經述贊一四卷	一七一八一
		涅槃經疏一四(二四)卷	九一三九二
		法花經疏一〇卷	一一一五〇〇
		弥勒經述贊三卷	九一三九二
			一二一五七

一三 勝莊	唯識論集一四卷	二三八六	唯識論要集一〇卷	一四〇	
	唯識論疏一〇卷	二三八七	唯識論疏一〇卷	三一五一〇	
一四 玄一	唯識論疏一〇卷	二三八八		一二一八	
	最勝王疏八卷	二〇〇四	勝莊師最勝王經疏	九一二五	
	金光明最勝王經疏八卷	二〇〇六	勝莊師金光明疏八卷	九一三九六	
	梵網經疏二卷	二二三五	梵網經疏二卷	一〇一三三〇	
	起信論問答一卷	二四五六	起信論問答一卷	一三一三五	
	仏性論義一卷	二四九一	仏性論義一卷	二二一三八二	
一五 義寂	二四九二				
	兩卷無量壽經記一卷	一八九五	隨願往生經記一卷	一二一三八〇	(唯識樞要私記二卷)
	兩卷無量壽經疏二卷	一八九六	法花經疏一〇卷	九一三九二	
	无量壽經記二卷	一八九七	兩卷無量壽疏二卷	一三一三五	
	法華經疏四卷	二二三〇	(唯識樞要私記二卷)	二二一六	
	法華疏一〇卷	二二三一		一八一四六一	
	隨願往生經記一卷	二二三二・			
	唯識樞要私記二卷	二二三六			
	樞要私記二卷	二三八二			
		二三八三			
	兩卷無量壽經疏五卷	一八九一	大般若經剛要一卷	一二一三八一	涅槃經疏五卷

『大日本古文書―正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福士）

兩卷無量壽經疏三卷	一八九二	涅槃經義記四（五）卷	一七一八二・八三	兩卷經疏三卷
無量壽經述記一卷	一八九三	涅槃經綱目一卷	一二一五三九	（涅槃經綱目二卷）
大般若經剛要一卷	二〇二七・	涅槃經疏一六卷	一二一三七九	（法花經料簡一卷）
理趣經幽讚一卷	二〇二八	法花經料簡一卷	一六一四〇二	（大般若經綱要一卷）
法華料簡一卷	二〇四〇	梵網經疏二卷	三一五四五	（法花論述記一卷）
涅槃經剛目二卷	二二三三・	梵網經文記二卷	一七一八七	（馬鳴生論疏一卷）
涅槃經剛目一卷	二二三四	梵網文記二卷	一八四六一	
涅槃經綱目一卷	二二七〇	理趣幽讚一卷	一七一八三	
涅槃經義記五卷	二二七一	兩卷經疏三卷	一七一三六	
涅槃經義記四卷	二二七二	兩卷無量壽經疏三卷	一二一三八〇	
涅槃經疏一六卷	二二七三	（法花論述記一卷）	一二一五四一	
云何偈一卷	二二七四		一七一〇八	
梵網經疏二卷	二二七五	（法花經論述記一卷）	一七一九八・一〇二	
梵網經文記二卷	二二三三	（馬鳴生論疏一卷）	三一八六	
法花論述記一卷	二二三四		一七一四〇	
馬鳴生論疏一卷	二五五〇			
馬鳴生論疏一卷	二五五二			
馬鳴生論疏四卷	二五五四			
馬鳴論疏一卷	二五五三			
十二章	二七一二			
十二卷章一二卷	二七二三・			
	二七一一四			

一六 大衍	如來藏經疏二卷 大方等如來經疏二卷 大方等如來藏經疏二卷 起信論疏一卷	二〇一二 二〇一三 二〇一四 二四五八	起信論疏一卷 大方等如來經疏二卷 (大方等如來藏經疏二卷)	一一一五六五 一七一七八 二一七一〇 二四一四四七	起信論疏一卷
一七 表員	花嚴文義要決一卷	一八八三	華嚴文義要決一卷	一一一五六七	
一八 (明皐)	海印三昧論一卷	一八八二	(海印三昧論一卷)	七四九一 二四一五三九	
一九 遁倫・道倫	大般若經疏一卷	二〇二六	大般若經疏一卷	三一三五三	
二〇 大賢	最勝王經料顯一卷 梵網經古述一卷 梵網經古述記一卷 成業論記一卷	一九九七 二二三七 二二三八 二六九六	梵網經古述記一卷 (成業論記一卷)	一六四四〇三 八一五三九 二四一五三九	
二一 玄隆	玄隆師章一卷 元隆師章六卷	二七六三 二七六四	玄隆師作章 玄隆法師章 玄隆師章一(四・一一・一六 卷	一二一四三三 一二一四三五 一一一〇〇・ 三〇七・三三二 一二一三五八	

『大日本古文書―正倉院編年文書』にみられる新羅仏教の二・三の問題（福士）

二二 審詳	審詳師経録一卷	二八九三	起信論疏一卷 審詳師経録一卷	一六―四三五 一三―三九・ 一七―一六	
----------	---------	------	-------------------	---------------------------	--